

文化芸術政策

1	概要	1
2	文化芸術政策の現状	1
	(1) 政府による制限とコントロール	1
	(2) 文化芸術を通じたアイデンティティの再構築	2
3	シンガポールにおける文化芸術政策の遷移	3
	(1) 文化芸術政策の遷移	3
	(2) 文化芸術政策の各指標に見る成果	3
	(3) ルネッサンス・シティ・プラン	4
	(4) アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー	5
	(5) SG アーツプラン	6
4	行政機関	7
	(1) 組織変遷	7
	(2) 文化コミュニティ青年省	8
	(3) 芸術評議会	9
	(4) 国家遺産局	10
5	文化芸術教育	11
	(1) 中等教育～前高等教育	11
	(2) 高等教育	12
6	文化芸術事例	13
	(1) 文化芸術施設	13
	(2) 文化芸術イベント	20

1 概要

シンガポールの文化芸術政策は、当初は経済成長的な意味合いの強い政策であったが、近年では芸術を通して心豊かな人間形成を目指す政策へと様相を変えている。

大きな流れとして、当初はハード面の環境整備等を引き金に、文化芸術の持つポテンシャルを観光事業の推進等に活用することをねらいとしていたものが、文化芸術自体をシンガポール人としてのアイデンティティを投射するもの、また人づくりに資するものとして捉える動きが出てきている。

2 文化芸術政策の現状

(1) 政府による制限とコントロール

シンガポールの憲法では、国民に言論と表現の自由にかかる権利を保障すると謳われている一方、その権利は法律によって制限される場合があるとされている¹。そのため、芸術活動においては、どの分野の作家も検閲と自主規制を意識しながら創作活動を行っているというのが現状である。

言論の自由について触れると、シンガポール政府はマスコミに介入し、厳しい監視の目を光らせている。1971年には政府の英語教育重視政策を批判した記事の編集者4名が逮捕されており、政府がそれらの新聞の経営株を取得して、編集者人事に介入を始めた歴史がある。現在シンガポール国内で発行されているすべての新聞は、東南アジア最大の出版企業であり実質的にシンガポール政府が管理しているシンガポール・プレス・ホールディング（SPH）の傘下にある。さらに、国営メディアはもちろんのこと私営ラジオも主管大臣の許可を受けなければならない²。

表現の自由についても同様で、かつては政府批判色の強い劇団メンバーの逮捕など強権的な対応が目立った政府も、1990年代に入りルネッサンス・シティ・プランなどの文化芸術政策を経て、国際的なクリエイティブ都市としてのイメージ戦略を重視し、柔軟に対応しているというスタンスを示し始めているが、政府によるコントロールは依然として続いているというのが実態である³。

一例をあげると⁴、2010年頃に、海外で活動していた著名なシンガポール人芸術家への助成金が「国内での活動成果が乏しい」という理由でカットされた。これは今後、海外でなくシンガポール国内に自国の芸術として還元するようにといった政府のメッセージであったが、そもそもとして、この芸術家が海外で活動していたのは政府の方針によるものだった。当初、政府にはシンガポールのグローバル都市化のために、良質な

¹ Article 14 of the Constitution of the Republic of Singapore, specifically Article

(1), guarantees to Singapore citizens the rights to freedom of speech and expression, peaceful assembly without arms, and association. However, the enjoyment of these rights may be restricted by laws imposed by the Parliament of Singapore on the grounds stated in Article 14(2) of the Constitution.

² 田村慶子『シンガポールを知るための 65 章（第3版）』（2013）p.88-89

³ 田村慶子『シンガポールを知るための 65 章（第3版）』（2013）p.106-110

⁴ 脚注3と同じ

シンガポール芸術を作成する芸術家を海外に紹介することで、シンガポールが文化にあふれて活気があり、クリエイティブな人材が住むにふさわしい国であることを他国へアピールしたいという思惑があった。しかし、それ以前から行われていた外国人受入施策⁵への批判を受け、「国内安定重視」に政府が方針を変えたため、先述の助成金カットにつながったのである。助成金カットという目に見える制限も芸術家にとって深刻な問題ではあるが、特筆すべきは、こういった方針転換が、何の公式な声明も説明もないままに行われるということである。芸術家は表現の自由についてだけでなく、政府の方針によって活動場所や活動内容についても制限されていることがこの事例からも窺える⁶。

(2) 文化芸術を通じたアイデンティティの再構築

2012年から施行されている現行の文化芸術政策「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー (The Arts and Culture Strategic Review : ACSR)」によって、文化芸術は全ての国民を対象とした国家アイデンティティを再構築するトリガーとして見なされるようになった。

しかし、シンガポールは多民族国家であるが故に国民的なレベルでのアイデンティティ確立が難しい状態にある⁷。シンガポールのアイデンティティとは何を指すのか、またはどのように位置づけられていくものなのだろうか。

例えばシングリッシュなどのシンガポール独特のいわば方言に近い言語や郷土料理などはアイデンティティと見なすことができると考えられる。もちろん、国籍や国歌なども共通項といえるが、方言や料理などの住民の生活に直結している要素の方がよりアイデンティティとして意識しやすいだろう。ただ、シングリッシュは中国訛りであるし、料理に関してはインド系のカレーなどもある。このような観点において、多様な民族性や文化性を一括りにすることは容易ではないといえるだろう。

他方、国民的なアイデンティティと都市及び国家のアイデンティティを別のものとして捉える考え方もある。大学教授である志賀野桂一氏は多様なコンテンツそのものではなく「方法論的同一性」に着目し、シンガポールの都市のアイデンティティは「ダイナミック・ケイパビリティ (dynamic capabilities)」、つまりシンガポールが非常に得意とする「急激に変化する環境に対処するために組織内外の資源を統合、構築、そして再構成する能力」ではないかと考察している⁸。

この「ダイナミック・ケイパビリティ」の確立のため、シンガポール政府が文化芸術政策をどのように位置づけ発展させてきたか、次項以下で紹介していく。

⁵ クレアレポート No.392「シンガポールにおける外国人受入施策」を参照。本稿では取り上げない。以下、クリアレポートについては同様。

⁶ 田村慶子『シンガポールを知るための 65 章 (第3版)』(2013)、pp.106-110

⁷ 川崎賢一『リー・クアンユーの死とシンガポールの文化政策・文化制度の将来』(2016) p.166

⁸ 志賀野桂一『熱帯グローバル創造都市国家・シンガポール急成長の謎に迫る—そのダイナミック・ケイパビリティと文化政策—』(2014) p.119

3 シンガポールにおける文化芸術政策の遷移

(1) 文化芸術政策の遷移

シンガポールにおける文化芸術政策の重要な要素として、政府機関とそれらが作成する計画の2つが挙げられる。それぞれ詳細は後述するが、ここではまずそれらの遷移を述べる。

マレーシアから独立して20年ほど、シンガポールは経済発展や政治的安定を重視し、シンガポール社会の基礎を固めその発展を続けるためのインフラ作りを優先してきた。この時代は文化政策がなされることがなく、「文化の砂漠」期と呼ばれることが多い⁹。

こうした中で、1989年になり、文化芸術評議会（Advisory Council on Culture and the Arts : ACCA）が設立された。そして同評議会によって作成された「文化芸術評議会報告書（Report of Advisory Council on Culture and the Arts）」において、芸術文化制度を作ることが提言されるとともに、今後の文化芸術普及のために芸術評議会（National Arts Council : NAC）の新設や美術館等の建設が明記された。

それを受け、1991年に芸術評議会、1993年に国家遺産局（National Heritage Board : NHB）が設立された。芸術評議会はアーティストへの助成金の交付などの支援を行い、国家遺産局は美術館・博物館などを運営する組織である。

その後、具体的な政策として、2000年に中期計画である「ルネッサンス・シティ・プラン（Renaissance City Plan）」が発表される。この政策はプラン1からプラン3まで3つの段階を経ることとなる。

2012年には、2025年までの長期計画である「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー2012（Arts and Culture Strategic Review 2012 : ACSR）」が発表される。この政策ではアートに触れやすい環境づくりや、文化を通じた国家アイデンティティの再構築など、人づくりに目を向けた政策となっているのが特徴である。

そして、2018年10月、2022年までの5か年計画として「SGアーツプラン（Our SG Arts plan）」が発表された。この計画も、芸術に対する感性や、シンガポールのアートそのものの発展など、物質的ではない、精神的な展開を目的とした人づくりに資するものである。なお、これら計画の詳細については、後述する。

(2) 文化芸術政策の各指標にみる成果

文化芸術政策の遷移に伴い、シンガポール国内における展覧会の開催日数や入場者数は下表のように推移している

⁹ 田村慶子『シンガポールを知るための65章（第3版）』（2013）p.91-92

図表1 シンガポール国内における展覧会関係指標の推移

指標	1996年	2005年	2015年	2018年
公演と展覧会の日数	6,000日	19,000日	26,000日	24,000日
有料公演入場者数	75万人	126万人	195万人	220万人
無料公演入場者数	— (※)	221万人	278万人	345万人
経済効果	S\$5億6千万 (約431億円)	S\$9億7千万 (約640億円)	S\$17億 (約1,500億円)	S\$18億 (約1,460億円) 【2017年数値】
芸術関係企業等の数	400社	650社	6,200社	5,200社

※統計が開始されたのは2003年で、その年の入場者数は99万人

出典：政府計画書及びウェブサイトを基にクレアシンガポール事務所作成

まず、公演と展覧会の開催日数については1996年から2018年までに約4倍に増えている。これは1996年のシンガポール美術館の完成、2002年のエスプラネードシアターのオープンなどが要因として挙げられる。

次に有料公演への入場者数については、1996年から2018年で約3倍に、同様に無料公演への入場者数については2005年から2018年で約1.5倍に増えている。観光客数の増加、エスプラネードシアターやコミュニティセンターなどにおける無料プログラムの充実などが要因として挙げられる。

経済効果については、上記のハード整備や観光客増加等の影響により1996年からこの22年間で約3.2倍となっている。

また、文化芸術政策の重要な柱となっている、アイデンティティの構築についてはどのような成果が出ているだろうか。結論から言うと、シンガポール国民のアイデンティティは国民自身によって今後も模索が続けられるものであると考えられる。

例えばシンガポールには国民が生活するための公団住宅があるが、それぞれの公団住宅で同一の民族が固まりすぎないように、人種構成比率が規定されている。これは民族の垣根を越えて、同じシンガポール人であるという意識を国民に持たせるためである。

(3) ルネッサンス・シティ・プラン (Renaissance City Plan)

2000年に発表された「ルネッサンス・シティ・プラン」には、2000年から2004年の5か年計画であるプラン1、2005年から2007年までの3か年計画であるプラン2、そして2007年からのプラン3の三段階からなる。

プラン1では文化芸術の基盤強化が中心的な方針として謳われているが、文化芸術教育を通して今後の経済発展に求められる創造力を養う方針などが述べられており、文化芸術政策が経済成長のために推進されることが前提となっているような色合いが

濃い。具体的には、ハード整備や芸術教育への投資、各種イベントの強化・開発などが施策として行われ、2001年にはシンガポール国立大学（National University of Singapore : NUS）の「ヨン・シュー・トー音楽学科（Yong Siew Toh Conservatory of Music）」を設立、2002年には総合芸術文化施設「エスプラネードシアター」をオープンしている。

プラン2ではアートやデザインなどのクリエイティブ産業の開発戦略が挙げられ、シンガポール政府観光局（Singapore Tourism Board : STB）と積極的に協力しながら、文化芸術の持つ経済的なポテンシャルをさらに推し進める政策となっており、プラン1と同様に文化芸術政策が経済戦略的な志向で捉えられているといえる。具体的には、全教育課程における芸術教育の組み入れ、大型美術展の開催などについて施策として取組み、2006年には現在も続く現代美術展示会「シンガポールビエンナーレ」の第1回が開催された。

プラン3は名目上2011年までの計画であったが、実際はシンガポール建国50周年の2015年を見据えて作成されている。本プランではワールドクラスの文化芸術地区を発展させる必要性が謳われ、イギリスやフランスなどにおける芸術イベントへの地元アーティストの出演等、他国との芸術イベントや機関との連携の強化など、より「国際的な文化都市」を意識した内容となっているのが特徴であり、文化芸術が国家のアイデンティティを映し出すものとして明記され始めている。具体的な施策として、2008年にシンガポール初の中等～前高等芸術専門学校である「School of the Arts (SOTA)」を創設したほか、2010年にはマリーナベイサンズにおいて美術展覧会「アートステージ・シンガポール」が開催された。

（4）アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー

2012年には、2025年までの長期計画である「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー」が発表された。この計画は、美術館等の整備に加え、芸術を通して心豊かな人間形成とシンガポールの伝統を大切に、シンガポール人としてのアイデンティティを育成することを目的とした現行の計画である。

ルネッサンス・シティ・プランにおいて度々言及があった”business”や”economy”といった経済戦略を匂わせる表現が影を潜めているのが興味深い。シンガポールの文化芸術政策において、経済成長から文化的な人づくりへとシフトしたことが分かる重要な計画である。

これまでのルネッサンス・シティ・プランは文化芸術の役割を国家の強化や経済発展というところに置いてきたが、本計画では「シンガポールの人と社会」を発展させる次の段階を望み、文化芸術が「シンガポールらしさやシンガポール人としてのアイデンティティ」の形成に重要な役割を持つと謳っている。2025年までの目標を「文化的で優雅な国民が、シンガポール人であることへの誇りを持った、帰る場所である国家となること（A nation of Cultured and gracious people, at home with our heritage,

proud of our Singaporean identity)」¹⁰としている。

また、本計画の中で特に強調されている点は、「文化芸術が国民の生活において無くてはならないものとする」と「幅広く適切な才能により文化的活動や芸術品を生み出すこと」である。具体的な目標として、2025年までに国民のアート鑑賞を40%から80%に、アート活動を20%から50%まで引き上げることなどが掲げられている¹¹。

それに加え、人材育成の対象を「高齢者や外国人、アマチュア、趣味で楽しむ人」などに広げ、さらに経済戦略としてではなく国家帰属意識を育ませるために、すべての国民が芸術の観客、愛好家、専門家、教育者、支援者として芸術に触れることができる社会を目指している。

この計画期間中の実績は次の通り。2012年に世界中からギャラリーを誘致し集積させたアート地区「ギルマンバラック (Gillman Barracks)」を設置。2013年にはシンガポール最大規模の芸術イベントである「シンガポール・アート・ウィーク (Singapore Art Week)」の第1回を開催。2015年にはシンガポール国立博物館をリニューアルオープンするとともに、建国50周年を記念し、シンガポール最大規模の美術館である「ナショナルギャラリーシンガポール (National Gallery Singapore)」とパリの私立美術館「ピナコテーク・ド・パリ」のアジア初の分館である「シンガポール・ピナコテーク・ド・パリ (Singapore Pinacothèque de Paris)」の二つの大型美術館をオープンした。

(5) SG アーツプラン

「SG アーツプラン」は2018年10月に発表された2022年までの5ヵ年計画である。本計画では、外国人と現地の人々など、異なる価値観を持つ人々の間に生まれてしまった断絶を芸術の力によって埋め、シンガポールの社会構造を強化する必要性が述べられるとともに、以後5年間の芸術評議会の優先事項が示されている。

この計画はアート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビューの目指した文化的な人づくりのコンセプトを受け継ぎ、それを発展させたような形になっている。

「人々をインスパイアする」、「コミュニティを団結させる」、「グローバルな立場を確立させる」という3つの方針のもとに、芸術評議会の役割のさらなる強化、観衆の更なる獲得、アート部門の様々な能力の育成、フリーランス芸術家の支援、テクノロジーの活用、芸術研究の強化、アートの社会に対する影響力の強化、シンガポール芸術の海外展開という8つの戦略が掲げられている。

¹⁰ THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW (2012)、p.15

¹¹ THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW (2012)、p.15

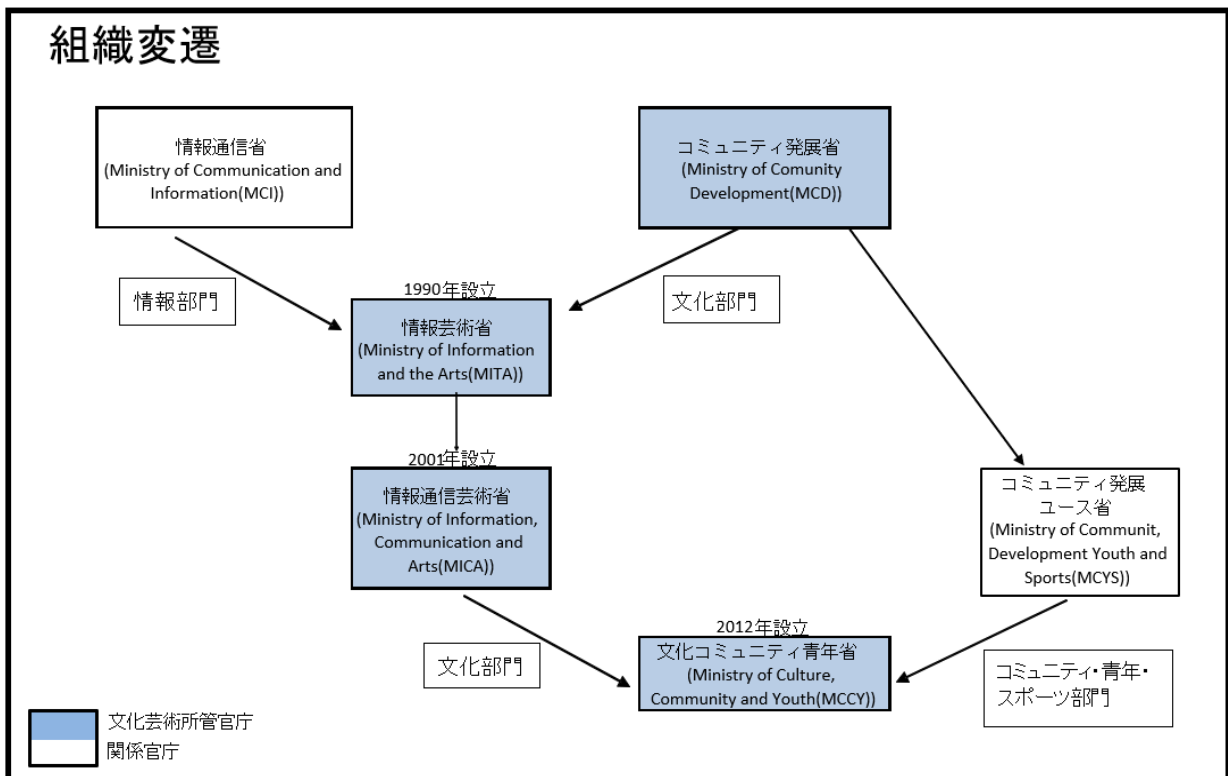
4 行政機関

(1) 組織変遷

現在、文化芸術政策を所管するのは、文化コミュニティ青年省（Ministry of Culture, Community and Youth : MCCY）である。同省は、過去何度かの組織改正を経て、現在の形になっている。

当初、コミュニティ発展省（Ministry of Community Development : MCD）の文化部門（Cultural Affairs Division）が文化芸術政策を所管していたが、1990年に同部門が情報通信省（Ministry of Communication and Information : MCI）の情報部門と合併し、情報芸術省（Ministry of Information and The Arts : MITA）が設立された。その後、放送公社（Singapore Broadcasting Authority）やインフォコム振興局（Infocom Development Authority）が加わり、2001年に情報通信芸術省（Ministry of Information, Communication and Arts : MICA）へと改名された。更に、2012年の「アート・アンド・カルチャー・ストラテジック・レビュー」の発表後に組織改編が行われ、情報通信芸術省の文化部門とコミュニティ発展ユース省（Ministry of Community, Development Youth and Sports : MCYS）のコミュニティ・青年・スポーツ部門が一緒になり、文化コミュニティ青年省が設立され、現在の形となった。

図表2 文化芸術政策所管省庁の組織変遷



出典：川崎賢一『リー・クアンユーの死とシンガポールの文化政策・文化制度の将来』（2016）、政府ウェブサイトを基にクリアシンガポール事務所作成

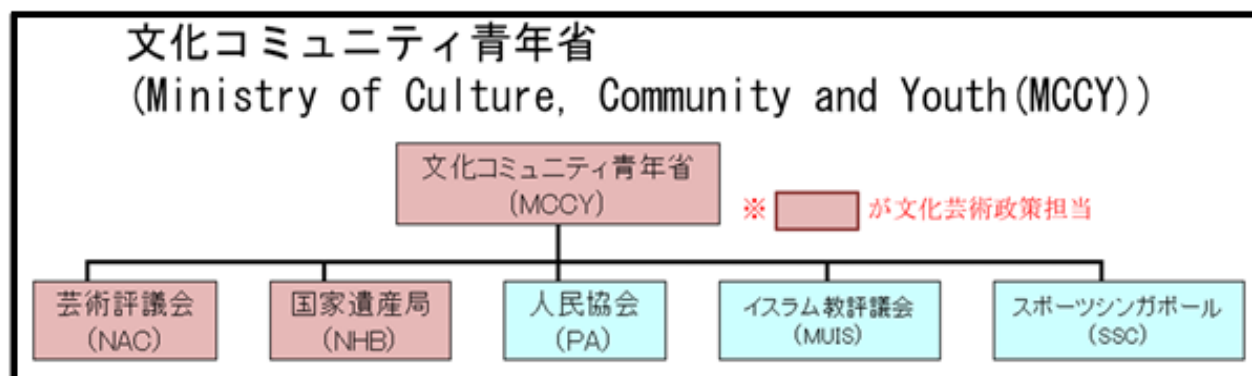
(2) 文化コミュニティ青年省

ア 概要

文化コミュニティ青年省は文化やスポーツを通して、自己形成や国家帰属意識を深め、また若者のボランティアや社会奉仕活動への参加を促し、親切で思いやりのある社会を作ることと目的とし、「シンガポールを充実した国民や思いやりのある社会とし、自信のある国家、ホームと呼べる場所とすること (To envision Singapore as A fulfilled and engaged people, A cohesive and caring society, A confident and resilient nation, The place we call home)」をビジョンとして掲げている。

下部組織には、芸術評議会、国家遺産局、人民協会 (People's Association : PA)、イスラム教評議会 (Majlis Ugama Islam Singapura / Islamic Religious Council of Singapore : MUIS)、スポーツシンガポール (Singapore Sports Council : SSC) がある。その中で、文化芸術政策を担当するのは、芸術評議会と国家遺産局である。

図表3 文化コミュニティ青年省組織図



出典：文化コミュニティ青年省ウェブサイトを基にクレアシンガポール事務所作成

イ 予算

2020年度の予算は文化コミュニティ青年省全体で約 S\$22.8 億 (約 1,767 億円) であり、うち全体の 7.1%に当たる約 S\$1.62 億 (約 126 億円) が文化コミュニティ青年省によって直接管理執行される文化芸術関連業務の予算となっており、更に全体の 5.7%に当たる約 S\$1.31 億 (約 102 億円) が芸術評議会へ、全体の 5.0%に当たる約 S\$1.13 億 (約 88 億円) が国家遺産局へ割り当てられている¹²。それらを合わせた文化芸術予算は約 S\$4.06 億 (約 317 億円) であり、2020年度のシンガポール全体予算額約 S\$1,055.9 億の約 0.4%に相当する¹³。

¹² Singapore Budget 2020(MINISTRY OF CULTURE, COMMUNITY AND YOUTH)
https://www.singaporebudget.gov.sg/docs/default-source/budget_2020/download/pdf/53-mccy-2020.pdf

¹³ Analysis of Revenue and Expenditure Financial Year 2020
https://www.singaporebudget.gov.sg/docs/default-source/budget_2020/download/pdf/fy2020_analysis_of_revenue_and_expenditure.pdf

参考として、2020年度の日本の文化庁予算は約1,067億円¹⁴で、文部科学省予算約5兆3,000億円¹⁵の約2.0%に当たり、日本全体予算額約102兆円6,580億円の約0.1%に相当する。

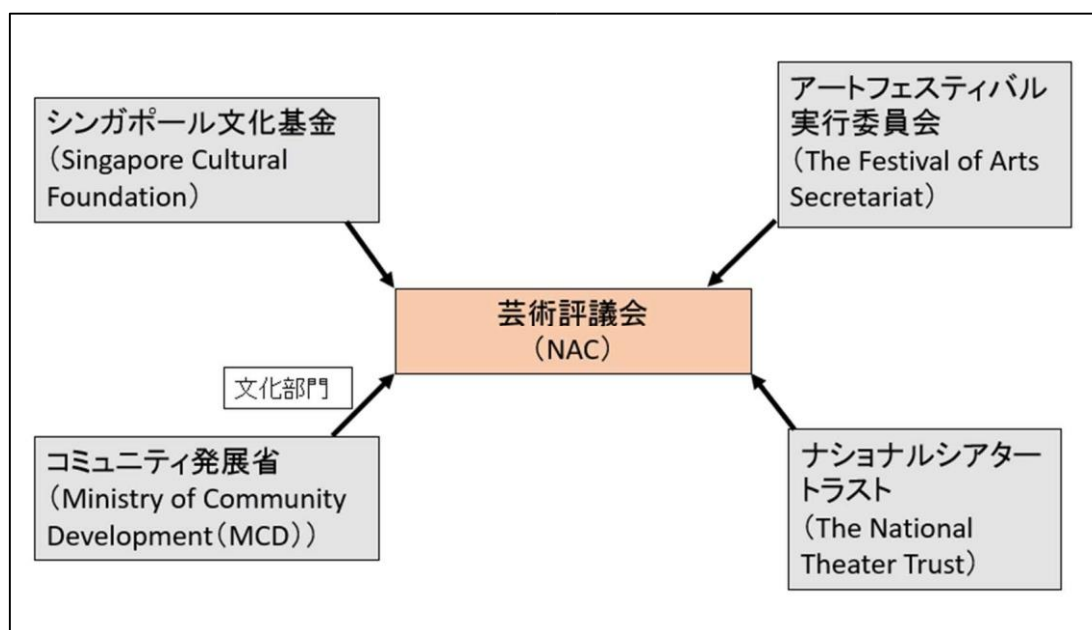
(3) 芸術評議会

ア 概要

1989年に発表された「文化芸術評議会報告書」に基づき、イギリスのアーツカウンシル¹⁶を手本として1991年に設立された。

当時文化芸術政策を扱っていた4つの機関「シンガポール文化基金 (Singapore Cultural Foundation)」、「コミュニティ発展省の文化部門」、「アートフェスティバル実行委員会 (The Festival of Arts Secretariat)」、「ナショナルシアタートラスト (The National Theater Trust)」が統合され、現在の組織になっている¹⁷。

図表4 芸術評議会の成り立ち



出典：芸術評議会ウェブサイトを基にクレアシンガポール事務所作成

¹⁴ 文化庁ウェブサイト 2020年度予算

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/91993601_01.pdf

¹⁵ 文部科学省ウェブサイト 2020年度予算

https://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/r01/1420672.htm

¹⁶ イギリス発祥の芸術文化の振興を目的とした公民協働による文化事業の推進組織。現在は日本でも文化庁や東京都などに設置されている

¹⁷ 芸術評議会 (NATIONAL ARTS COUNCIL) ウェブサイト

<https://www.nac.gov.sg/aboutus/milestone.html>

イ 施策

ミッションは「生活に必要不可欠なものとして芸術を創造し、鑑賞する手助けをすること (To champion the creation and appreciation of the arts as an integral part of our lives)」、ビジョンは、「人々に刺激を与え、地域社会をつなぎ、シンガポールをグローバルに位置付ける多様で特徴的な芸術の拠点となる (Home to diverse and distinctive arts which inspire our people, connect our communities and position Singapore globally)」である。

主な政策の一つに芸術・文化振興のための助成金の交付がある。助成金をアーティストに交付するだけでなく、企業からもスポンサーシップを募っており、調査・実験・ワークショップに係る費用やそれらに係る資材費等についても助成を行っている。

また、芸術評議会は、アーティストに芸術作品の作成や保管ができる物件を提供し、地元住民にアーティストの活動を見てもらうことで芸術の素晴らしさをより身近に感じてもらう「アートハウジング事業」を行っている。

アートハウジングに住むアーティストが、障害者や高齢者などのグループと関わって芸術の素晴らしさを伝えるほか、無料コンサートを実施したり、子どもたちと一緒にアートを作成したりといった取り組みを行っている。例えば、シンガポールの繁華街であるロバートソンキー (Robertson Quay) には「Theatre Works S」という多目的文化施設があり、小規模のサーカスや映画鑑賞会などの催しが定期的に開催されている。

そのほか、芸術評議会は芸術イベントに若者の芸術家を積極的に参加させる機会を設け、熟練アーティストの仕事などを勉強させている。例えば、ユニクロや DBS 銀行¹⁸といった大企業と若いアーティストとが関わる機会を積極的に作るような取り組みを実施するなど、住民、企業、後述する学校等が一体となった文化芸術振興を推進しており、文化芸術政策の実質的な行政窓口機関としての役割を担っている。

(4) 国家遺産局

ア 概要

芸術評議会同様、1989年の「文化芸術評議会報告書」に基づき、1993年に設立された。国家遺産局はシンガポールの遺産管理人として、歴史を語り、経験を共有し、シンガポールの精神を伝える責任を持ってシンガポール国内の美術館、博物館の管理・運営を行っている。

イ 施策

ミッションは「共有の遺産を守り、称える (To preserve and celebrate our shared heritage)」。国家遺産局は教育、国家づくり、文化的理解のために多様なコミュニテ

¹⁸ シンガポールの地場大手銀行である The Development Bank of Singapore の略称

イの遺産を守り、促進する役割を担っている。ビジョンは「過去に誇りを持ち、未来のために遺産を遺す (Pride in our Past, Legacy for our Future)」である。

所管している施設に、アジア文明博物館、インドヘリテージセンター、マレーヘリテージセンター、シンガポール国立博物館、プラナカン美術館、切手博物館、孫中山南洋記念館、ブキ・チャンドゥ回想館がある。

5 文化芸術教育

(1) 中等教育～前高等教育 (secondary school～junior college)

先のルネッサンス・シティ・プランでも述べた通り、文化芸術政策において人的資源の開発にも重点が置かれ、教育現場でも文化芸術分野への取り組みが広がっていった経緯がある。

中等・前高等教育については、2008年に芸術を専門とする「School of the Arts : SOTA」が開校したことが大きく、これは1990年代からの教育改革¹⁹に伴う芸術教育の位置づけの変化を物語るものである。この学校の設立の背景には、専ら経済戦略的な文脈としての芸術振興政策における創造力を持った人的資源開発の側面と、多様性と柔軟性を標榜する教育改革における新しい技術教育の試みという側面があった。

SOTAでは、狭い専門領域に特化するのではなく、幅広い芸術に触れるとともに、自然科学や社会科学などの学術領域を統合させた総合的な芸術教育を志向している。芸術振興政策と教育政策、双方の要求を満たしつつ、高い次元で過去にない新しい芸術教育、新しい中等教育段階を実践している成功例といえる²⁰。

SOTAには、1学年200人、全校で1,200人の13～18歳の生徒が在席している。在学期間としては、シンガポールにおける小学校卒業後から大学入学までに通う中等学校 (secondary school) (4～5年) と、大学準備教育機関 (junior college) (2年) に相当する。

入学試験は中等学校に進学する場合と同様、全国統一初等学校修了試験 (Primary School Leaving Examination : PSLE)²¹に加え、芸術に関する試験がある。

卒業時には、シンガポールの大学へ進学する際に必要なシンガポール・ケンブリッジ上級教育認定試験 (GCE-A レベル)²²と同等の国際バカロレアディプロマ²³が得られ、国内に限らず国外の大学へ進学する選択肢も得られる。

カリキュラムは文学や言語、社会科学、自然科学、数学などの学術分野の科目に加え、視覚芸術 (絵画・彫刻など)、音楽、演劇、舞踊などの専門コースがある。

¹⁹ クレアレポート No.420「シンガポールの教育制度改革について」を参照

²⁰ 佐々木幸ほか『シンガポールの芸術振興政策と芸術教育：School of the Arts Singaporeの事例』(2014) p.78-86

²¹ クレアレポート No.416「シンガポールの英語教育について」を参照

²² Singapore Cambridge General Certificate of Examination, Advanced Level の略

²³ International Baccalaureate diploma examination の略

(2) 高等教育 (University)

高等教育においては、従来から文化芸術に関する教育機会の提供がなされてきた。それは、1938年には既に南洋美術専科学院 (Nanyang Academy of Fine Arts : NAFA) というカレッジレベルの芸術学校が設立されていたことから分かる。

現在シンガポール国内では以下の4校が芸術分野の高等教育を提供している。どれも校舎のデザインが奇抜であることが特徴である。

ア 南洋美術専科学院

1938年に設立された。現在は民間により運営されているが、政府からの補助金も得ている。卒業時には、ディプロマ、学位が得られる。3Dデザイン、芸術管理、デザインとメディア、美術、ファッション、ダンス、音楽、演劇のコースがある。

イ ラサール芸術学校 (LaSalle college of the Arts)

南洋美術専科学院の次に歴史を持つ芸術学校。非営利団体により運営されている、1985年に設立された芸術学校である。卒業時には、ディプロマ、学位、修士号が得られる。美術、映画とアニメ、クリエイティブ産業デザイン、デザインコミュニケーション、ファッション、空間デザイン、現代音楽、ダンスと演劇の8つの学部が用意されている。

ウ シンガポール国立大学 (NUS)

2001年に「ヨン・シュー・トー音楽学科」が設立された。シンガポールで初めて、音楽の学士と修士号を得られる全日制課程である。全生徒に奨学金が与えられるが、現在のところ入学はシンガポール人に限られている。オーケストラ楽器やピアノ、作曲といった学科が用意されている。

エ 南洋工科大学 (Nanyang Technological University : NTU)

2005年に「芸術デザイン及びメディア学部 (School of Art Design and Media)」が作られた。美術分野の学位を得られる4年制の学部が用意されている。



南洋美術専科学院



ラサール芸術学校



シンガポール国立大学 (NUS)



南洋工科大学 (NTU)

出典：各教育機関ウェブサイト

6 文化芸術事例

独立後 20 年ほどは「文化の砂漠」と呼ばれていたシンガポールもこれまで前述の数々の計画や取り組みを通じて、現在では多くの芸術施設が設立され、また多様な文化芸術イベントが開催されるに至った。本項では各種計画の具体的成果ともいえる文化芸術事例について紹介する。

(1) 文化芸術施設

ア シンガポール国立博物館 (National Museum of Singapore)

シンガポール国立博物館は、1887 年にオープンした、シンガポールで最も古く最大規模の博物館である。最初は学校の図書館の一部としてスタートしたが、1887 年に博物館となり、シンガポールが独立した 1965 年からは歴史に重点を置いた博物館として、現在の名前が付けられるようになった。

シンガポールの歴史については、「シンガポール歴史ギャラリー (Singapore History gallery)」というコーナーに詳しく展示されている。シンガプーラ時代²⁴

²⁴ ごく少数のマレー人が漁業を営み、華僑が内陸部を開墾し農業に従事していたほかは未開のジャングルだった、ラッフルズ上陸前の時代。サンスクリット語で「シンガ＝ライオン」、「プーラ＝都」という意味

(1299～1818年)、植民地時代(1819～1941年)、昭南島時代(1942～1945年)、シンガポール時代(1945年～現在)の4つにエリアが分かれている。昭南島時代については、シンガポール人が日本軍の占領下でどう生活をしていたのか、「サバイビング昭南(Surviving Syonan)」という別の展示室でも詳しく説明がなされている。

そのほか、「シンガポールの建設者」とされるトマス・ラッフルズ²⁵の命令で実質的にシンガポールを統治していたウィリアム・ファーカーが、当時生息していた動植物を記録として絵師に描かせたものが「ウィリアム・ファーカー・コレクション(William Farquhar Collection)」として記録に残っており、貴重な資料として展示されている。

また、2016年には、日本のデジタルアート集団である「チームラボ(teamLab)」がこのコレクションを題材として、常設展示「Story of the Forest」を開催した。デジタル空間でコレクションの動植物を鑑賞することができ、専用のアプリをダウンロードすれば、その動植物の詳細を確かめることもできるなど、芸術と教育がうまく融合した展示であったといえる。これはシンガポール政府がチームラボに直接依頼して実現したものである。

これらのほか、近年は建築物の外壁を活かしたプロジェクションマッピングが多く行われている。それらは主に各民族の母国をイメージしたコンセプトが基調となっており、多民族理解・融和に大いに貢献していると言えるだろう。



ナショナルミュージアム外観



館内展示の様子

出典：クレアレポート 496号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

イ ナショナルギャラリーシンガポール (National Gallery Singapore)

ナショナルギャラリーシンガポールは、2015年に旧市庁舎や旧裁判所を改築して作られた世界最大級の美術館であり、シンガポールをはじめ珍しい東南アジアの現代美術が中心に集められている。絵画、彫刻、映像など9千点以上のコレクションを有する²⁶。

²⁵ 田村慶子『シンガポールを知るための 65 章 (第3版)』(2013) p.18

²⁶ NATIONAL GALLERY SINGAPORE ウェブサイト

本項では当美術館の特徴を5つ紹介したい。

まず1つ目は、旧市庁舎や旧裁判所といった歴史的に重要な建物をうまく改築し、訪問者が内装も楽しむことができるようになっている点である。

次に、福岡アジア美術館、東京国立近代美術館、ポンピドゥー・センター（フランス）、オルセー美術館（フランス）、熱帯博物館（オランダ）、国立ベトナム歴史博物館（ベトナム）の6館がオフィシャルパートナーとして名を連ねている。これにより、お互いの所蔵する美術品の展覧会の開催などの相互交流が行われており、関係国との文化交流に大きく貢献している。

続いて、子供が楽しんで訪れ、創造的な発想力を育成できるようなプログラムを用意している。例えば2017年から始まった「ギャラリーチルドレンビエンナーレ」では、ワークショップや体験型アートを提供している。また、「Keppel centre for art education」という常設の部屋では子どもが絵描きを楽しむことができる。子ども同士が同じ空間で同じ作業に取り組むことで国民としての共通意識を育むことができれば、シンガポールが望む国民アイデンティティの確立に一步近づくことができるかもしれない。

4点目は、マリーナベイサンズを含む周辺の絶景を眺められる屋上庭園が開放されている他、人気のあるレストランが多数集まっているなど、展示以外でも訪問者が楽しめる場所となっていることである。

最後に、シンガポール国立博物館と同様、近年では建築物の外壁を活かしたプロジェクトマッピングがよく行われていることが特徴である。

そのほか、過去の展示内容として、2017年6月から9月にかけて日本人アーティストの草間彌生氏の企画展「Life is the heart of a rainbow」が開催された。この展示会では写真撮影が許可されており、訪問者が展示会の様子をSNSに投稿するなどして人気を集めた。初めての日本人アーティストの企画展であり、同施設で過去最大の動員数を記録した。

さらに、2017年5月から10月にかけて、チームラボによるデジタルアート作品「世界は均質化されつつ、変容し続ける」が展示された。空間に大きな球体をたくさん浮遊させ、人が触れると球体全ての色が変わるといった体験型アートの作品内容であった。また、チームラボは2018年1月から8月にかけて同じくデジタルアート作品である「Walk, Walk, Walk : Search, Deviate, Reunite」と「花と人-Dark」の作品を展示している。



ナショナルギャラリー外観

出典：クレアレポート 496 号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

ウ シンガポール美術館（Singapore Art Museum）

シンガポール美術館は 1996 年にオープンした、シンガポール初の美術館である。ミッションスクールを改築して建てられたもので非常に美しく、東南アジアの現代アートや絵画、彫刻などの現代美術が集まっている。

同美術館ではシンガポールビエンナーレ（詳細は後述）を主催しており、毎回メイン会場となっている。



シンガポール美術館外観

出典：クレアレポート 496 号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

エ アートサイエンスミュージアム（Art Science Museum）

シンガポールで人気の観光地の一つでもあるのが、2011年にオープンしたアートサイエンスミュージアムである。蓮の花のような形が特徴で、マリーナベイサンズを運営しているラスベガス・サンズ社により運営されており、同敷地内にある。

チームラボによる体験型の展示「Future World」が 2106 年 3 月から常設展示として続いており、人気を博している。

またこの美術館では、シンガポールでは珍しく国際巡回展示が行われ、これまでにゴッホ展やダ・ヴィンチ展、ポップアートで有名なアンディ・ウォーホル展などが行われている。

そのほか、ビッグデータ、素粒子物理学、古生物学、宇宙探査、遺伝子工学などの

科学的展覧会も開催されている。



アートサイエンスミュージアム外観

出典：クレアレポート 496 号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

オ エスプラネードシアター (Esplanade Theater)

エスプラネードシアターは、2002年にオープンした総合文化芸術施設であり、2つの大きなコンサートホールとシアター、4つのスタジオ、屋外シアター、図書館、屋上解放エリアなどから成る。そのほか、レストランやショッピングモールも併設されている。また、シアター内のフリースペースや最寄りの駅に直結した地下道もアートスペースとして活用されている。直射日光を避けるため、ドームの屋根には多数の突起が取り付けられており、その形状から「ドリアンドーム」とも呼ばれている。公益法人であるエスプラネード社により運営されており²⁷、同社はシンガポール政府から援助を受けている。

音楽やバレエ、演劇などが行われるほか、無料で楽しめる野外劇場や芸を披露できるスペースがあり、プロだけでなくアマチュアや住民にとって気軽に文化芸術に触れられる場所となっており、多民族参加型の場と機会を提供しているともいえる。

メインのコンサートホールには 1,827 の座席があり²⁸、オーケストラコンサート、セミナーや会議、授賞式などが行われている。もう一つのメイン会場であるシアターには 1,950 の座席があり²⁹、音楽演奏やオペラ、ダンス公演、劇、映画上映、セミナーや会議、授賞式などが行われる。

特徴の一つとして、プロだけでなく、新しい才能の発見・育成の取組みとして、アマチュアへの公演の機会を与えていることが挙げられる。シアター内のフリースペースでは無料で公演を行うことができ、これは才能の発掘だけでなく、異文化に触れ理解する機会が増えることにも繋がっている。

完成した 2002 年から 2018 年までの 16 年間でおよそ 41,000 の公演が催され、

²⁷ エスプラネード社の主務官庁は文化コミュニティ青年省 (MCCY)

²⁸ ESOLANADE ウェブサイト <https://www.esplanade.com/venue-hire/concert-hall>

²⁹ ESOLANADE ウェブサイト <https://www.esplanade.com/venue-hire/theatre>

2,800 万人が来場した³⁰。次のステージとして、550 の座席を持つ中規模会場のウォーターフロントと呼ばれる新しい建物が建築される予定であり、2019 年に工事を開始し、2021 年の完成を目指している³¹。



エスプラネードシアター外観

出典：クレアレポート 496 号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

カ プラナカン博物館 (Peranakan Museum)

プラナカンとは、マレー語やインドネシア語で「子ども (anak)」を意味する言葉から派生したといわれ、東南アジア女性と外国人男性との通婚による子孫であり、華人系、アラブ系、インド系など様々なプラナカンが存在する。マレー社会のプラナカンは華人系が多いことから、シンガポールでプラナカンというと一般的に華人系プラナカンのことを指している³²。

そんなプラナカンの歴史と文化を知ることのできる施設として、プラナカン博物館がある。1912 年にオープンし、戦争を挟みながら何度か場所を移転し、1982 年から現在の場所に位置している。プラナカン博物館は過去に学校として使われていた建物を使用しており、プラナカンの人々が使用する宝飾品、家具、食器、洋服、工芸品 (刺繍品) などが展示されている。

³⁰ ESPLANADE ウェブサイト <https://www.esplanade.com/about-us/the-esplanade-story>

³¹ ESPLANADE ウェブサイト <https://www.esplanade.com/about-us/the-next-stage>

³² 安里陽子『新移民の社会統合と脱領域的な主体の構築：シンガポールにおけるプラナカン概念をめぐる』(2014)



プラナカン博物館外観

出典：クレアレポート 496 号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

キ アートハウス (The Arts House at the Old Parliament)

アートハウスは 2004 年にオープンした、絵画の展示、映画や劇の上演を行う施設である。かつて国会議事堂として使われていた歴史ある白亜の建物を活かし、内装もそのままとなっている。建物の一部は有料で芸術団体に貸し出しており、ワークショップなども開催されている。



アートハウス外観

出典：クレアレポート 496 号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

ク ギルマンバラックス (Gillman Barracks)

ギルマンバラックスは 2012 年に誕生した新しいアート地区である。シンガポールの西部にあり、かつてイギリス軍の宿舎として使われていたコロニアル様式の白亜の建物を改築してオープンした。シンガポール経済開発庁 (Economic Development Board : EDB)、芸術評議会、JTC コーポレーション (商業地区の開発管理を行う法定機関) 共同のプロジェクトである。アジアを中心に世界各国から現代美術を扱う

ギャラリーを誘致し、6.4ヘクタールの広大な敷地に13のギャラリーが集まる³³。日本からは「オオタファインアーツ」、「水間アートギャラリー」、「小山登美夫ギャラリー」の3ギャラリーが参加した。シンガポール・アート・ウィーク（詳細は後述）の会場でもある。



ギルマンバラックス外観

出典：クレアレポート 496号 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生

(2) 文化芸術イベント

ア シンガポールビエンナーレ (Singapore Biennale)

シンガポールビエンナーレは2006年から始まった現代美術展示会であり、現在は概ね隔年で開催されている。直近では2019年11月から2020年3月まで「**Every Step in the Right Direction** (世界を変えるワンステップ)」をテーマに東南アジアの現代美術を中心とした作品が集められ展示が行われた。主催は開催年によって異なるが、シンガポール美術館が主催することが多い。その他、シンガポール国立博物館やプラナカン美術館、アジア文明博物館などでも開催される。

2019年11月から2020年3月まで開催された第6回目は36の国と地域から77組のアーティストが参加し³⁴、日本からは「あいちトリエンナーレ 2019」でも展示された田中功起氏の「抽象・家族 (2019)」が展示された。

イ シンガポールライターズフェスティバル (Singapore Writers Festival)

シンガポールライターズフェスティバルは、毎年開催されている国際的な文学イベントである。当初、1986年から隔年で開催されていたが、2011年から毎年開催されている。直近では2019年11月に開催された。内容としては、国際的に著名な作

³³ Gillman Barracks NEDIA RELEASE 「GILLMAN BARRACKS ART GALLERIES TO OPEN SEPTEMBER 15」 <https://www.gillmanbarracks.com/files/press/20120823-gillman-barracks-art-galleries-to-open-se/file/20120824-gillman-barracks-art-galleries-to-open-september-15.pdf>

³⁴ SINGAPORE BIENNALE ウェブサイト <https://www.singaporebiennale.org/about>

家や出版社などを世界中から集め、パネルディスカッションやワークショップなどを開催しながら作品を紹介するものである。参加者はシンガポールの作家のほか、アメリカ、イギリス、オーストラリア、インドネシア、マレーシアなど多彩な国々から参加しており、日本からは青山剛昌氏（「名探偵コナン」作者）、綿谷りさ氏（「蹴りたい背中」作者）が参加した実績がある。

メイン会場はアートハウスであり、そのほかにもナショナルギャラリーやアジア文明博物館でも開催されたことがある。

ウ アートステージ・シンガポール（Art Stage Singapore）

アートステージ・シンガポールは 2010 年から始まった美術展覧会であり、マリナベイサンズで開催され、世界中のギャラリーからアジアのアーティストの作品を中心に出版・売買が行われる。また、展示に加え、アーティストやコレクターによるトークイベントも開催されている。日本、アメリカ、中国、イギリス、オーストラリア、マレーシア、インドネシア、韓国、タイなど世界中のギャラリーが参加しているイベントである。

直近では第 8 回目が 2018 年の 1 月に開催され、約 80 のギャラリーが参加したが、年々参加するギャラリー数が減っており、2019 年はわずか 45 まで落ち込み、開幕を目前に開催中止となった。

エ シンガポール・アート・ウィーク（Singapore Art Week）

シンガポール・アート・ウィークは 2013 年から開催されている芸術イベントであり、直近では第 8 回目が 2020 年 1 月に開催された。アートステージ・シンガポールと時期を合わせて開催されており、ナショナルギャラリー、アートハウス、エスプラネード、シンガポール美術館、ギルマンバラックス、アートサイエンスミュージアムなどで展示やワークショップ、パフォーマンス、トークイベントなどが行われる。近年はリトルインディアやジュロンイースト、ロバートソンキーなどの街中においても展示やワークショップが開催されている。また、ナショナルギャラリーで開催される「Light to Night Festival」やギルマンバラックスで開催される「Art After Dark」など、外壁を利用したプロジェクションマッピングの人気の高い。

参考文献

- RENAISSANCE CITY REPORT (2000)
- RENAISSANCE CITY 2.0 (2005)
- RENAISSANCE CITY PLAN III (2008)
- THE REPORT OF THE ARTS AND CULTURE STRATEGIC REVIEW (2012)
- Singapore Budget 2020
- (一財) 自治体国際化協会『クレアレポート No.496 シンガポールの文化芸術政策に見る地域アイデンティティの確立と多文化共生』(2019)
- 田村慶子『シンガポールを知るための 65 章 (第 3 版)』(明石書店、2013) p18、88-89、91-92、106-110、119
- (一財) 自治体国際化協会『クレアレポート No.392 シンガポールにおける外国人受入政策』(2013)
- 川崎健一『リー・クアンユーの市とシンガポールの文化政策・文化制度の将来』(2016) p.166
- 志賀野佳一『熱帯グローバル創造都市国家・シンガポール急成長の謎に迫る—そのダイナミック・ケイパビリティと文化政策—』(2014) p.119
- 安里陽子『新移民の社会統合と脱領域的な主体の構築：シンガポールにおけるプラナカン概念をめぐる』(2014)
- (一財) 自治体国際化協会『クレアレポート No.420 シンガポールの教育制度改革について』(2015)
- 佐々木幸ほか『シンガポールの芸術振興政策と文化教育：School of the Arts Singapore の事例』(2014) p78-86
- (一財) 自治体国際化協会『クレアレポート No.416 シンガポールの英語教育について』(2015)

参考ウェブサイト

- 芸術評議会 (NATIONAL ARTS COUNCIL)
<https://www.nac.gov.sg/aboutus/milestone.html>
- Nanyang Academy of Fine Arts
<https://www.nafa.edu.sg/>
- LaSalle college of the Arts
<https://www.lasalle.edu.sg/>
- National University of Singapore
<http://nus.edu.sg/>
- Nanyang Technological University
<https://www.ntu.edu.sg/Pages/home.aspx>
- NATIONAL GALLERY SINGAPORE
<https://www.nationalgallery.sg/collections>

- ESPLANADE
<https://www.esplanade.com/venue-hire/concert-hall>
<https://www.esplanade.com/venue-hire/theatre>
<https://www.esplanade.com/about-us/the-esplanade-story>
<https://www.esplanade.com/about-us/the-next-stage>
- Gillman Barracks NEDIA RELEASE 「GILLMAN BARRACKS ART GALLERIES TO OPEN SEPTEMBER 15」
<https://www.gillmanbarracks.com/files/press/20120823-gillman-barracks-art-galleries-to-open-se/file/20120824-gillman-barracks-art-galleries-to-open-september-15.pdf>
- SINGAPORE BIENNALE
<https://www.singaporebiennale.org/about>
- 文化庁 2020 年度予算
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/yosan/pdf/91993601_01.pdf
- 文部科学省 2020 年度予算
https://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/r01/1420672.htm

【執筆】

一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所
 所長補佐 田名邊 雄

【監修】

所 長 天利 和紀
 調 査 役 池上 卓久
 所長補佐 尾崎 文彦